

『新撰万葉集』の漢詩における和歌的表現

梁 青

1. はじめに

寛平五年(893)に成立した『新撰万葉集』(上巻)はそれぞれの和歌に一首の七言絶句の漢詩が付けられている詞華集である¹⁾。『新撰万葉集』における漢詩は六朝詩、『遊仙窟』、白居易の漢詩の影響を多く受けていることが先行研究によって明らかになった²⁾。ところが、『新撰万葉集』の漢詩は和歌をもとに作られたもので、自ずと和歌的表現を帯びている。これらの和歌的表現に関する本格的な議論は殆どなされてこなかった。

そこで本稿は、『新撰万葉集』の二首の漢詩を取り上げ、それと中国詩との違い、和歌との関連を明らかにしたい。

2. 「夏夜胸燃不異蛩」

上夏35 夕去れば蛩よりけに燃ゆれ
ども光見ねばや人のつれなき
怨深喜浅此^{うら}閨情、怨みは深く喜びは
浅し 此^{ねや こころ}の閨の情
夏夜^{こと}胸燃不異蛩。夏の夜胸は燃え
蛩に異ならず
書信休来年月暮、書信休み来りて
年月暮れたり
千般^{もんてい}其奈望門庭。千般 門庭を望む
を其奈^{いかん}せむ

この歌は、夕方になると、私の恋の思
いは蛩の火よりもいっそう激しく燃える

が、蛩のように思いの火が見えるわけでは
ないから、あの人は冷淡な態度をとる
のだろうか、という意である。それに配
される漢詩は、く悲しみの気持ちが深く、
喜びの情が浅い。訪れてこないあの人を
ひたすら待っている。夏の夜には、私の
胸の思いは激しく燃えて、あたかも蛩の
ようだ。あの人からの手紙が来なくなっ
て、いくつもの年月が過ぎていった。私
はどうしようもなく、ただ荒れた庭を眺
めている」という内容となる。転句「夏夜
胸燃不異蛩」は、「夏の蛩」を詠んでい
る。『礼記』(月令)に「季夏之月、温風始
至、蟋蟀居^レ壁、鷹乃学习、腐草為^レ蛩」と
あるように、蛩は晩夏の風物であるが、
実際の応用に際しては、

霜氣下[○]孟津[○]、秋風度[○]函谷[○]。…

況復飛蛩夜、木葉落紛紛。

(『玉台新詠』卷四・王融・古意)

初霜実[○]細葉[○]、秋風吹[○]乱蛩[○]。

(『芸文類聚』卷三十二・人部十六・

閨情・梁・簡文帝・秋閨夜思詠)

巫山秋夜蛩火飛、疏簾巧入坐[○]人
衣[○]。

(『全唐詩』盛唐・杜甫・見[○]蛩火[○])

蛩火乱飛秋已近、辰星早没夜初長。

(『全唐詩』中唐・元稹・夜坐・

〈『和漢朗詠集』所収〉)

銀燭秋光冷[○]画屏[○]、輕羅小扇撲[○]流
蛩[○]。

（『全唐詩』晚唐・杜牧・秋夕）
とあるように、蛩は殆ど秋の景物として
詠まれている³⁾。こうしてみれば、「夏夜
胸燃不_レ異_レ蛩」に見られる「夏の蛩」は伝
統的な漢詩表現から逸脱してしまう。本
来、中国詩には春閨怨・秋閨怨が圧倒的
に多く、上夏35のような夏閨怨は殆どな
い⁴⁾。また、この詩句における激しい恋心
を蛩の火に喩えるという発想は、中国詩
に殆ど例を見ないものである。『玉台新
詠』における蛩の描写を見てみると、

蛩飛_二綺窓外_一、妾思_二霍將軍_一。

（卷八・劉邈・秋閨詩）

幽閨情脉脉、漏長宵寂寂。

草蛩飛_二夜戶_一、糸虫繞_二秋壁_一。

（卷七・簡文帝・楚妃嘆）

夕殿下_二珠簾_一、流蛩飛復息。

長夜縫_二羅衣_一、思_レ君此何極。

（卷十・謝朓・玉階怨）

とあるように、蛩は「秋閨怨」と深く関
わっている。ところが、上記の閨怨詩に
おけるほのかに光る蛩は待つ女の激しい
恋心の象徴ではなく、女の寂しさや孤独
感を引き立てる景物である。「單身如_二蛩
火_一、持_レ底報_二郎恩_一」（『玉台新詠』卷十・
鮑令暉・歡聞）のように蛩を自身に喩え
る例もあるが、上夏35のような激しい恋
心の比喩ではなく、蛩のはかなさを詠ん
だのである⁵⁾。ここの「蛩火」は蛩の光で
なく、蛩そのものを指すが、燃えるよう
な「蛩火」は詠物詩に詠まれることが多
い。平安人に親しまれていた『芸文類聚』
には、

著_レ人疑_二不_レ熱_一、集_レ草詠_二無_レ煙_一。

到来燈下暗、翻往_二雨中_一然。

（卷九七・鱗介部下・鱗虫豸部・

蛩火・梁元帝・詠_二蛩火_一）

秋窗餘照盡、入_レ暗早蛩來。
忽聚還同色、恒燃詎_レ落_二灰_一。

（同上・陳・楊綰・賦_二

得照_二映秋蛩_一詩）

とみえる。「蛩」を「火」に喩えることを
起点として、くその火が体についても熱
く感じられないし、群れをなして草むら
に集まっても煙も出てこないし、雨の中
で燃え続けても灰も落ちない」という趣
向を生む。だが、ここに見られる「燃(然)・
熱・煙・灰・蛩火」の語群は、恋心の比
喩として用いられているわけではない。
なお、中国詩には「火—恋心」の比喩表現
はあるが、極めて少ない。

聞_二渠擲_二入火_一、定是欲_二相燃_一。

（『遊仙窟』唐・張文成）

積恨顔將老、相思心欲燃。

（『玉台新詠』卷五・範雲・思_レ歸）

思_レ君如_二明燭_一、中宵空自煎。

（『玉台新詠』卷十・王融・

奉_レ和_二代_二徐幹_一二首）

などはその例である。ここまで見てきた
通り、中国詩においては、「火—恋心」の
比喩表現〈「蛩・火・燃」の語群〉〈蛩の
閨怨詩〉はそれぞれ異なる系統に属する
もので、蛩を恋心に喩える表現は殆ど見
られない。

一方、和歌の世界に目を転じてみると、
『万葉集』には蛩の歌が「この月は君来ま
さむと大船の思ひ頼みていつしかと我が
待ち居れば黄葉の過ぎて去にきと玉梓の
使ひの言へば蛩なすほのかに聞きて…」
（巻十三・3344・作者未詳）の一例しか
ない。「蛩」は「ほのかに」の枕詞として
使われる。九世紀末になると、蛩の歌は
急展開を遂げており、蛩に関する恋歌も
登場するようになる。その背後には、漢

詩文の影響が考えられる。

明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらし
夜は螢の燃えこそわたれ

(古今集・巻十一・恋一・
543・読人知らず)

昼はなき夜は燃えてぞながらふる螢
も蟬も我が身なりけり

(古今六帖・4015・ほたる・貫之)
この二首の歌における「蟬」と「螢」との
対は、「昼蟬已傷_レ念、夜露復沾_レ衣。昔別
曾何道、今夕螢火飛_レ」(『玉台新詠』巻十・
呉均・雜絶句四首)の漢詩を想起させ、
「螢一恋」という新しい詠歌素材が中国
より伝来した可能性を示唆している⁶⁾。
「長恨歌」の「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑尽
未_レ成_レ眠」(『白氏文集』0596)が平安朝
の詩歌に多大な影響を与えていることは
多く指摘されている⁷⁾。

螢の恋歌の形成は、このように漢詩と
の深い関わりの下に進められているが、
和歌自身の言語意識の成熟と切り離して
考えることはできない⁸⁾。上記の和歌に
おいては、「ひ」が「思ひ」「火」の掛詞で
あり、「火」と「燃ゆ」が縁語関係を構成し
ている。そもそも中国詩の中には容易に
見出せない火を恋心に喩える表現は、和
歌には古くから多くの用例がみられる。

大伴宿祢家持贈_二娘子_一歌七首
思はぬに妹が笑ひを夢に見て心のう
ちに燃えつつぞ居る

(万葉集・巻四・718・大伴家持)
吾妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富
士の高嶺の燃えつつかあらむ

(万葉集・巻十一・
2695・作者未詳)

君といへば見まれ見ずまれ富士の嶺
のめづらしげなく燃ゆるわが恋

(古今集・巻十四・恋四・
680・藤原忠行)

上記の歌から明らかなように、万葉歌に
詠み継がれてきた「燃える—恋心」の比
喩表現を、「燃える」の縁で「燃える富士
の高嶺」「燃える螢」等の素材と融合させ
ることによって、新たな恋歌が作り出さ
れている。なお、「思ひ・火・燃ゆ」とい
う縁語・掛詞が練り上げられたのは、前
掲の螢の詠物詩における「翻_二往_一雨中_一
然」「恒燃_二詎_一落_二灰_一」などの影響も見逃せ
ないと思われる。螢の恋歌は螢の詠物詩
と直接的な出典関係を結んでいないかも
しれないが、その言語上のあやは螢の詠
物詩の刺激を受けて生成したのではない
かと思われる。

『枕草子』の「夏は夜。月のころはさら
なり。闇もなほ、螢の多く飛びちがひた
る。また、ただ一つ二つなど、ほのかにう
ち光りてゆくもをかし」とあるように、
螢を秋の景物とする中国詩と違って、王
朝文学では螢は夏の風物としてとらえ
られている点が、早くから指摘されてき
た⁹⁾。和歌においては、

螢をよみ侍りける

音もせて思ひに燃ゆる螢こそ鳴く虫
よりもあはれなりけれ

(後拾遺集・巻三・夏・
216・源重之)

宇治前太政大臣卅講のち歌合
し侍りけるに、螢をよめる
沢水に空なるほしのうつるかともゆ
るは夜はの螢なりけり

(後拾遺集・巻三・夏・
217・藤原良経)

とあるように、『後拾遺集』以後、螢は夏
の素材として固定化されていく。早くも

九世紀末に、寛平御時后宮歌合と『新撰万葉集』において蛍の歌が夏の部に収められている。以上、中日の詩歌における蛍の季節観を見てきた結果、上夏35の漢詩に詠まれた「夏の蛍」は日本の季節感に合致していることがわかる。

上夏35の漢詩は蛍を夏の景物ととらえるだけでなく、蛍を激しい恋心の象徴として詠んだ点において、和歌の表現に接近し、伝統的な中国詩から外れてしまう。本来、蛍の火は仄かに光るという程度の明るさしかなく、心の中で勢いよく燃えている情炎との類似性は高くないが、言葉の次元において、蛍の光と恋の思いに「燃ゆ」という共通性を見出すことができ、また「火・思ひ(こひ)」の掛詞を介して両者が関係づけられるようになる。つまり、「夏夜胸然不_レ異_レ」は景物の客観的形容というより、言葉の連想によって成り立ったものである。その類例を挙げてみよう。

上夏25 よひの間もはかなく見ゆる
夏虫に迷ひまされる恋もするかな
好女係心夜不眠、好女係心して 夜眠ねず

終宵臥起涙連々。終宵臥起して 涙連々たり

贈花贈札迷情切、花を贈り札を贈り
迷情切なり

其奈遊虫入夏燃_レ。遊虫の夏に入りて
燃ゆるを 其奈にせん

後二句「贈_レ花贈_レ札迷情切、其奈_二遊虫入_レ夏燃_一」は、男の訪れを待ち望んで恋に惑う思いの炎を、身を焦がす夏の虫に譬えて詠んでいる。夏虫を恋心に喩えるのは、中国詩に類例が見当たらないが、和歌の世界では、

夏虫にあらぬわが身のつれもなく人
を思ひに燃ゆる頃かな

(寛平御時后宮歌合・夏・

63・右・作者未詳)

夏虫を何か言ひけむ心から我も思ひ
に燃えぬべらなり

(古今集・卷十二・恋二・

600・躬恒)

とあるように、恋の情熱を夏虫に比する歌が極めて多い¹⁰⁾。「其奈_二遊虫入_レ夏燃_一」は、「夏虫・燃ゆ・火(思ひ)」の縁語・掛詞との関わりの中で形作られたものであろう。

3. 「愁人慟哭類虫声」

上秋70 声たててなくぞしぬべき
秋の野に朋まどはせる虫にはあらねど

愁人慟哭類虫声、愁人の慟哭 虫声
に類す

落涙千行意不平、落涙千行 意平ら
かならず

枯槁形容何日改、枯槁の形容 何れ
の日に改まらむ

通宵抱膝百憂成。通宵膝を抱へて
百 憂 成る

声をあげて泣いてしまいそうだ、秋の野で友を見失ってひとりぼっちで鳴いている虫ではないけれど、という歌の主体は、虫に重ね合わせた詠み手自身である。対する漢詩は、く憂えている人が虫のように声をあげて激しく泣いている。涙は千本の筋となって流れて、心は穏やかではない。やつれ衰えてしまった容姿が、いつになったら輝きを取り戻すのか。一晚中膝を抱えていると、数えきれない憂愁が生まれてくる」という意である。当

詩の「虫の音」について、中野方子氏は六朝閨怨詩の影響を述べる¹¹⁾。

凜凜歲雲暮、螻蛄多鳴悲。…

独宿累長夜、夢想見容暉。

(『玉台新詠』卷一・古詩八首)
寒園夕鳥集、思園草虫悲。

嗟兮當春服、安見御冬衣。

(『玉台新詠』卷五・柳惲・搗衣詩)
涼陰既滿草虫悲、誰能離別長夜時。

(『玉台新詠』卷九・張率・白暗歌辭三首)
虫凄慘而聲冷、露咄咄而泣懸。

(『經国集』17・滋野貞主・重陽節神泉苑賦秋可哀、応制)
孤飛夜鵲簷枝怨、暗織思虫機杼悲。

(『經国集』206・滋野貞主・七言秋月夜一首)

『玉台新詠』における虫の音は一つの素材として詠まれ、孤閨を守る女性の孤独感を象徴している。「螻蛄多鳴悲」「草虫悲」を擬人表現として見ることができる。勅撰三集の漢詩はこのパターンを継承して、虫の音に我が身の愁いを重ねて秋の悲しさを表現している。

唐代になると、虫の悲しげな音を聞いて涙を流した例が現れる。

促織甚微細、哀音何動人。…

久客得無淚、故妻難及晨。

(『全唐詩』盛唐・杜甫・促織)
孤骨夜難臥、吟虫相唧唧。
老泣無涕洟、秋露為滴瀝。

(『全唐詩』中唐・孟郊・秋懷)
虫聲竟夜引鄉淚、蟋蟀何自知人愁。

(『全唐詩』中唐・戎昱・客堂秋夕)
雁影將魂去、虫聲與淚期。

(『全唐詩』中唐・李端・

贈岐山姜明府)

とあるように、六朝閨怨詩に比べて、虫の音と人事の融合の度合いが深まっていく。しかも杜甫詩のように虫の音は一つの素材にとどまらず、詩の主題として詠まれるようになる。『菅家文草』の「欲將虫泣斷人腸、殊感秋深不免霜。今夜何因寒怨急、被多折菊草棲荒」(371・重陽夜、感寒蛩、応製)は上秋70の「愁人慟哭類虫声」とともにこれらの唐詩の影響下にあるものだと考えられる¹²⁾。秋の虫の切ない声が直接的に断腸の思いを誘うという形で詠まれている。

「虫声」「愁人」という組合せ自体は、六朝閨怨詩より、次の白居易の漢詩に拠るところが大きい¹³⁾。

虫声冬思苦於秋、不解愁人聞亦愁。

(『白氏文集』2632・冬夜聞虫)
虫の悲しげな鳴き声を聞くと、「愁人」の愁いがより一層掻き立てられるという。『白氏文集』には、虫の音を詠み込んだものが12首あり、王朝詩歌に多大な影響を与えている¹⁴⁾。そのことは、

切切暗窗下、嚶嚶深草裏。

秋天思婦心、雨夜愁人耳。

(0754・秋虫・〈『和漢朗詠集』所収〉)
霜草欲枯虫思苦、風枝未定鳥栖難。

(3287・答夢得秋夜独坐見贈・〈『和漢朗詠集』『千載佳句』所収〉)
叫曙噉噉雁、啼秋唧唧虫。
只应催北客、早作白須翁。

(0873・江夜舟行)
といった詩句が『和漢朗詠集』『千載佳

句』などに収められていることによって明らかである。秋の終わりになると虫の音も弱々しくなり、そこには凋落する人生をかたどるものとしての面影が添えられている。中国詩に由来したこの虫の擬人表現は、同時に和歌の世界にも流入していく。「虫」は『万葉集』に「この世に楽しくあらば来む世には虫にも鳥にも我はなりなむ」(巻三・384)の一例のみであるが、『古今集』になると、

我がために来る秋にしもあらなくに
虫の音きけばまづぞ悲しき

(巻四・秋上・196・読人知らず)

これさだのみこの家の歌合せの
うた

秋の夜の明くるも知らず鳴く虫は我
がごとものやかなしかるらむ

(巻四・秋上・197・藤原敏行)

秋の夜は露こそことに寒からし草む
らごとに虫のわぶれば

(巻四・秋上・199・読人知らず)

とあるように、11首にのぼっている。さらに、『千里集』(894年)では、白居易の「虫の音」の詩句を題とし、それを和歌に翻案する試みがなされる。

37 霜草欲_レ枯虫思苦

おくしもに草の枯れゆく時よりぞな
く虫のねも高く聞こゆる

45 啼_レ秋唧唧虫

秋の夜を寒みなきつる虫のねは我が
宿にこそあまたきこゆれ

上秋70の和歌と漢詩は「虫の音」という題材の流行を背景に生まれてきたのである。

しかし、中国詩では人間の悲しみを引き立てるために虫の悲しげな音がよく詠まれるが、人間の泣き声を虫の鳴き声に

喩えるものは殆どない。前に挙げた「虫の音」に関する中国詩には、「愁人慟哭類_二虫声_一」の類例は見当たらない¹⁵⁾。「慟哭」は大声をあげて泣く意で、先行する和歌の「声たててなく」に対応している。「唧唧」「切切」「嚶嚶」と形容される細く小さい虫の音は、「慟哭」にはどうも似ていない。だが、和歌の世界においては、「なく」は「泣く」「鳴く」の掛詞になり、「鳴く」と「泣く」が言葉のレベルにおいて互いに置き換えられる。こうして、中国詩に由来した虫の音の擬人表現から、人間の泣き声を虫の鳴き声に擬する歌が派生したのである。その中には、

虫のごと声にたててはなかねども涙
のみこそ下に流るれ

(古今集・巻十二・恋二・

581・清原深養父)

物いひける女に、せみのもぬけ
をつゝみてつかはす

是をみよ人もすさめぬ恋すとして音を
なく虫のなれるすがたを

(後撰集・巻十一・恋三・

793・源重光)

といった、「愁人慟哭類_二虫声_一」に類似する歌が見られる。虫以外にも、人の泣き声が鹿や雁や郭公など様々な動物の鳴き声に喩えられる場合もある。

秋山に恋ひする鹿の音たててなきぞ
しぬべき君が来ぬ夜は

(新撰万葉集・上秋60・作者未詳)

人を思ふ心は雁にあらねども雲ぬに
のみもなき渡るかな

(古今集・巻十二・恋二・

585・清原深養父)

五月山梢を高め郭公なく音空なる恋
もするかな

いずれも、自分自身を「なく動物」に重ね合わせる歌である。「泣く・鳴く」の掛詞を駆使して自然と人事との重層を図る工夫がなされたのである。

以上を勘案すれば、「愁人慟哭類_{虫声}」は「泣く・鳴く」の掛詞を念頭に置きながら、中国詩に由来した〈虫の音を聞いて泣いた〉を換骨奪胎して作り出された比喩表現と言えよう。

4. まとめ

以上、『新撰万葉集』の二首の漢詩における和歌的表現について考察した。蛩と恋との結びつきはもとより六朝閨怨詩から学んだものであるが、中国詩では蛩の閨怨詩と「蛩・火・燃」の語群は本来別系統に属し、互いに相関していない。しかし、『新撰万葉集』の漢詩においては、掛詞「火・こひ」を介して、「蛩・火・燃」の語群を「蛩—閨怨」と新たに關係づけて、「夏夜胸燃不_レ異_レ蛩」という漢詩表現が練り上げられている。そして、上秋70の和歌「声たててなくぞしぬべき秋の野に朋まどはせる虫にはあらねど」では、「虫が人間のように泣く」という中国的要素を取り入れながら、「泣く・鳴く」の掛詞を駆使して心情に関する叙述と物象に関する叙述とを重ね合わせることで、独自の表現世界が形成されている。対する漢詩もこの掛詞を念頭に置いて、中国詩に学んだ「虫鳴—人泣」の擬人表現を前後倒置して、「愁人慟哭類_{虫声}」という新たな表現を作り出した。

これらの事例には、「中国詩→和歌→『新撰万葉集』漢詩」という交流の図式が

はっきりと看取できる。『新撰万葉集』の漢詩は和歌の影響を受けて、中国詩とはまったく異なるものに変容していく¹⁶⁾。これらの和歌的漢詩表現から、王朝人の国風意識の高揚が端的に窺える。今後は、中国詩にはない、和歌独自のものが本集漢詩にどのような影響を与えているのかについて、さらなる追究を行いたい。

注

- 1) 『新撰万葉集』の引用は『新撰万葉集注釈』（新撰万葉集研究会編、和泉書院、2005年）による。和歌と漢詩には同一の番号をつける。番号は京都大学国語国文資料叢書十三『新撰万葉集：京都大学蔵』（臨川書店、1979年）に付された番号による。本集漢詩の解釈については、本稿は『新撰万葉集注釈』と半沢幹一・津田潔氏「『新撰万葉集』注釈稿」（共立女子大学文芸学部紀要・東京工業高等専門学校研究報告書、1994年～）に負うところが多い。また、『玉台新詠』『白氏文集』の本文は『新釈漢文大系』（明治書院）、『全唐詩』は『全唐詩』（中華書局、1960年）、『懷風藻』『文華秀麗集』『万葉集』『古今和歌集』の引用は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。他の引用和歌は『新編国歌大観』（角川書店）に従った。なお、一部表記などを改めた部分がある。
- 2) 泉紀子氏は「新撰万葉集における漢詩と和歌」（大阪女子大文学国文編、1981年）で、本集漢詩の六朝閨怨詩の受容を論じる。新聞一美氏は「『新撰万葉集』の成立と意義」（国文学：解釈と鑑賞76(8)、2011年、43頁）において、本集漢詩の『遊仙窟』の受容を言及する。

また、本集漢詩が白居易の漢詩に影響を受けることは、小島憲之氏「恋歌と恋詩一万葉・古今を中心として」(文学44-3、1976年、304～305頁)、津田潔氏『『新撰万葉集』上巻・恋歌における白詩の受容について』(『白居易研究年報1』勉誠出版、2000年)など先学の指摘するところである。

- 3) 『新撰万葉集』の漢詩の成立時期を考慮して、本稿は唐までの漢詩のみを対象とする。用例の調査は、『文淵閣四庫全書電子版』(迪志文化出版、2005年)をはじめ、『先秦漢魏南北朝詩』『文選』『玉台新詠』『芸文類聚』『全唐詩』を中心に行った。調べた限り、唐までの晩夏の蛩を詠んだ漢詩は4首しかない。「一点新蛩報秋信、不知何処是菩提」(中唐・賈島・夏夜登南樓)における蛩は秋の兆しとして詠まれ、「松蔭忽微照、獨見蛩火芝」(晩唐・皮日休・太湖詩)、「露色浮寒瓦、蛩光墮暗叢」(晩唐・李頻・夏日宿秘書姚監宅)「助照蛩隨舫、添盤筍迸厨」(晩唐・薛逢・夏夜宴明月湖)における蛩はいずれも恋と無関係のものである。なお、『経国集』に「潭鳥鳴兮音冷、岸蛩落兮火微」(12・仲雄王・重陽節神泉苑賦秋可哀、応制)と見えるように、平安前期の王朝漢詩は殆ど中国詩の伝統に従って秋の蛩を詠んでいるが、『新撰万葉集』上夏35の漢詩に詠まれた夏の蛩は異色を放つ。平安後期になると、国風化の深化につれて、「玉琴暗調蟬声急、紅燭自連蛩影跡」(『本朝無題詩』266・藤原明衡・夏日作)のように、多数の「夏の蛩」が詠まれるようになる。

- 4) 例えば、『芸文類聚』卷三十二・人部

十六・閨情には、「春宵詩」「秋閨夜思」「冬曉詩」があるが、「夏閨怨」が見えない。

- 5) 『新撰万葉集注釈』(319頁)は「蛩」を、燃えるように激しい心の状態の比喩に用いた例は、中国の詩には見えない。すなわち第二句の表現は、35(歌六九)に引かれた結果、本来の漢詩の表現を逸脱したものと考えられる。ただし、ここで、「蛩」は、さきに見た「近代呉歌九首(其七) 歎聞」の例のように、はかなく寂しい女性の姿の比喩となってもいる」と指摘する。
- 6) 丹羽博之「平安朝和歌に詠まれた蛩」大手前女子大学論集26、1992年、94～95頁。
- 7) 泉紀子「特集 長恨歌—愛と死の文学 長恨歌と伊勢物語—「夕殿蛩飛思悄然」」『白居易研究年報11』勉誠出版、2010年。
- 8) 前掲の丹羽博之「平安朝和歌に詠まれた蛩」、94頁。
- 9) 山崎みどり「蛩のイメージ」中国詩文論叢第三集、1984年、38～39頁。なお、是貞親王家歌合の「置く露に朽ちゆく野辺の草の葉や秋の蛩となりわたるらむ」には、『礼記』『腐草為蛩』を下敷きにした秋の蛩の例がみえる。
- 10) 上夏25の歌が「心地観經第六世間品 偈云、譬如飛蛾見火光、以愛火故而競入、不知焰炷燒燃力、天命火中、甘自焚」という仏典を踏まえて、恋の火に惑わされ身を焦がしている様を火に向かって飛んでゆく飛蛾に見立てる歌としてとらえる説もある(『古今余材抄』契沖全集第8巻、岩波書店、1973年)。
- 11) 中野方子『平安前期歌謡の和漢比較

文学的研究』第二章第二節「秋閨怨の受容—『新撰万葉集』から『古今集』へ—」笠間書院、2005年、67～70頁。

- 12)『新撰万葉集注釈』(206頁)は道真詩は「白居易詩からの影響のあらわれとすべきであろう」と指摘するが、白居易詩以外の唐詩については言及していない。
- 13)『新撰万葉集注釈』206頁。
- 14)『新撰万葉集注釈』206頁。
- 15)中唐孟郊には「客子^〇昼呻吟、徒為虫鳥音」(病中吟)があるが、類例は極めて少ない。しかも虫の音に喩えられるのは、「慟哭」でなく「呻吟」である。
- 16)拙稿「『新撰万葉集』漢詩にみられる和歌の表現—「涙河」の漢詩を中心に」(和漢比較文学49、2012年)を参照されたい。

付記

本稿は、第123回表現学会東京例会での研究発表を加筆修正したものです。ご質問ご助言下さった方々に記して心より感謝申し上げます。(厦門大学)

◇表現研究関連文献紹介

趙剛・賈琦共著『会話分析』

A5版・377頁(北京・高等教育出版社
2013年7月刊 定価30元)

「現代日語語学叢書」(全五巻)の一冊として刊行されたもので、中国語による。他に『語法学』『文化語学』『社会語学』『対比語学』がある。

本書は、趙教授(西安交通大学)の専門である日本語の語用論的研究と賈講師(博士・西安交通大学)の主たる研究である談話の日中対照研究、それぞれの成果をベースにして、日本語の「会話」にみられる表現的機構を分析的に論じたものである。

本書の構成は、三部構成で、第一部基礎編では、日本語の会話の研究史や「会話分析の方法」が概説され、本体である第二部方法論では、「会話の構造」「会話の策略(ストラテジー)」「会話の管理」の章が立てられている。「会話の管理」では、近年会話研究で話題のフィラー・メタ言語・談話標識・相づちといったトピックなどが詳細に論じられている。

第三部応用編では、「対比会話分析の研究」や「語用論的観点に基づく会話分析」の章が有り、特に後者において会話における方略の種々が取り上げられているが、興味深い論考である。

用例には、西安交通大学の研究室独自の収集になる『間接会話ストラテジー会話資料』を始め、各種の会話データベースや現代日本語の小説などを広く活用して、豊富な用例が示されていて有益である。

(糸井通浩)